



第28回「海をきれいにする運動」 応募作品審査発表



むつ湾漁業振興会と青森県漁業協同組合連合会の主催による第二十八回「海をきれいにする運動」は、むつ湾関係者のご協力により、相当の成果をあげて終了致しました。

この運動は、むつ湾の公害絶滅・漁場環境を図り、資源保護自然環境保全に努め、陸奥湾の海をより美しいものにする事を目的に毎年七月二十日～十月三十一日まで展開されています。

そして、この運動の一環として、むつ湾内における小・中学生を対象に海をテーマとした作品募集をしたところ、図面四一九点、ポスター二八五点、作文二二一点、標語五〇六点の合計で一、二二一点の多数の応募があり、審査員による厳正な審査が行われた結果、次のとおり優秀作品が決定されました。

また、この中で図面の優秀作品（小学校六点、中学校四点）については、「第二十三回全国海の子絵画展」へ出品されておりますので、結果がございました関係者へお知らせ致します。

本運動について、ご協力をいただきました関係者並びに学校に対して、厚くお礼を申し上げます。

尚、入賞された作品につきましては青森県水産ビル二階ギャラリーへ展示致しておりますので、来館の際は是非ご覧下さい。



応募作品審査風景

作文の部
特選

『私たちの大切な海』

浅所小学校 六年 三津谷 浩子

キユツ、キユツ。今、私は「なぎさの教室」の漁業体験で漁船に乗るために、救命う衣のひもを結んでいます。「なぎさの教室」は町の子と海の子が交流しながら、漁業への理解と海への親しみを深めていこうという平内町の事業です。今年の夏休みに浅所小の五、六年生と青森市の宮田小の四、五年生が行うことになったのです。

私はつりで使う小さな船には一度乗ったことはありませんが、つりの船の約二倍くらいで、速度計もたくさんついている大きな漁船に乗るのは初めてです。

「船に乗って。」と、漁師さんが言ったら、総勢七十五人が約十二人ずつ六つのグループに分かれて、岸べきから船べりをまたいで、急いで船に乗りこみました。岸べきから、

「ドドドドド。」六せきすべての船が出発し、私はとてもわくわくしてきました。船はだんだんスピードをあげ、水しぶきが顔までとんできました。

漁港を出発して約十分、五千メートルぐらいはなれていて、漁師さんがホタテののしをおろしているところ、船が止まりました。そこは少し冷たい風が吹いて、きれいなエメラルドグリーン色の海がどこまでも続いています。漁師さんが私たちにホタテを見せるため、海の中から浮き玉に結んであったのしを上げて、のしからロープを一本はずしました。百個以上のホタテがついているロープを機械にまきつけていき、U字型の部分にホタテをつなぐために使っていたアゲビーンが引っかかってホタテがはずれ、カゴの中にどんだんたまっていきます。ガチャガチャとホタテがぶつかり、まるで楽器のようでした。カゴの中のホタテを見ていたら、漁師さんが、

「次にこのち貝を見て下さい。」と言って、船の上に置いてあったネット状のあみの中から、ホタテのち貝を出して見せてくれました。漁師さんは船の真ん中の道具が入っているところからスプーンを取り出し、ち貝をすくい取り、

「このカレーを食べる時に使うスプーン一ぱい分に、このち貝はいくつあるでしょう。」と言いました。みんなから、

「百個かな。」

「いや、百五十個じゃないの。」

と、いろいろな意見が出ました。

「みんなで数えてみて下さい。」

と、漁師さんがわたしてくれ、班ごとに手のひらの上にのせて、指で数え始めました。私たちの班は五ミリから十三ミリくらいのち貝が百個以上もあり、私はとてもおどろきました。

「みんな、何個ぐらいあった。実は、このスプーン一ぱいで、約百個くらいあるんだよ。この十倍の十一センチメートルくらいまで大きくなるには、だいたい三年くらいはかかるんだ。」

と、漁師さんが教えてくれました。いつも食べているホタテがこんなに小さくて、大きくなるまで約三年間もかかるとは知りませんでした。夏も冬も、ホタテは平内の海の中にずっと生きて、プランクトンを食べて、大きくなるうとしていくのです。私は、「ホタテを食べているのは、このきれいな海のおかげなんだなあ」と思いました。改めて海を見てみると、遠くにはたくさん浮き玉や友だちが乗っている漁船が四、五せき浮かんでいて、いつもとはちがつて、大きく大きく見えました。

そして、スプーンに入っていたホタテのち貝を漁師さんに返しました。漁師さんはち貝をかこの

中に入れ、またゆっくりと海の中にもどしてやりました。あつという間に、二十分が過ぎ、もう帰る時間になったので、漁港にもどるために船が動き始めました。

漁港に着いて、船べりをまたいで岸べきに降りる時、ふと下を見ると、茶色い海が目に入りました。私はびっくりして急いで岸べきにわたり、もう一度その茶色い海をのぞいて見ました。そこには、どこから流れ着いたのかわからないおかしなものや発ぼうスチロールのかけらが、ビニールがくるるなどのたぐさのゴミやよれた油などが、波におされて岸べきにぶつかり、左右にゆれています。海の色もコーヒィのようににごったこげ茶色で、海の中の様子はほとんど見えません。こんな海には、プランクトンも住めません。沖とはあまりにもちがついて、私はとてもがっかりしました。このままゴミが増えていくと、ホタテの養いにくがでなくなると、海がゴミだらけになってしまいます。そうなるなら、漁師さんたちがあんなに一生けん命ホタテを養いよくしている苦労も無たになつてしまいます。

そして、私は学校で行っている清掃活動の思い出しました。浅所小学校では白鳥が飛来する浅所海岸を守るために、月に一回高学年がゴミ拾いをしています。浅所海岸にもたくさんゴミが落ちています。拾っても拾っても、ゴミはなくなりません。特に夏休みが終わった後は、海岸に来た人々が捨てていった空きカンやおかしものから、タバコの吸い殻などがいつも二倍くらいに増えていきます。今、私たちにできることは、ゴミを捨てないことです。ゴミを捨てないという気持ちがあれば、それはだれにだってできる簡単なことなのです。たつたそれだけで、おいしいホタテや魚がいっぱいとれるのです。あの小さなち貝が無事に大きくなれるよう、魚がたくさん増えるよう、私たちの大切な海をきれいに守っていききたいです。

むつ湾の
かがやく波と青い海

大湊中学校 1年 齊藤 有紀